病院間連携における破砕赤血球判定方法の検討

◎磯貝 奈美[1)]、佐藤 聖子[1)]、西井 智香子[2)]、杉浦 縁[3)]、大澤 道子[1)]、星 雅人[1)]
藤田医科大学病院[1)]、藤田医科大学岡崎医療センター[2)]、藤田医科大学ばんたね病院[3)]

【背景と目的】
藤田医科大学病院には 5 つの連携病院があり、我々血液検査室では施設間差を含めた血液像の標準化に着手している。第 22 回愛知県医学検査学会では、赤血球形態判定において、1 視野中の赤血球数を推測することで異常赤血球割合を算出する簡易的判定方法を発表した。今回、本簡易的判定方法を応用して、臨床的意義の高い破砕赤血球判定の標準化を目的とした検討をしたので報告する。

【検討方法】
藤田医科大学病院 9 名、ばんたね病院 4 名、岡崎医療センター10 名の技師を対象とし、破砕赤血球判定が（－）から（2＋）の末梢血塗抹標本 4 枚について、以下の方法で検討した。①4 枚の標本を普段自身が判読している方法で判定した。②本簡易的判定方法について説明会を開催し、さらに判定の補助として 1 視野中（1000 倍）の赤血球が 200 個、300 個、400 個程度分布している視野のモデル写真を顕微鏡の付近に掲示した。③再度①の標本について判定を行い、説明会前後の判定結果を比較した。

【結果】
破砕赤血球が出現している標本を陽性と判定できた割合は、本簡易的判定方法の説明会前では 52%、説明会後は 78%であった。そのうち認定血液検査技師はどちらも 100%、血液像判読経験年数 5 年以下の技師では説明会前では 46%であったが説明会後では 73%に増加した。

【考察】
本簡易的判定方法を用いることで、破砕赤血球を正確に判定できる割合が高くなった。特に血液像判読の熟練度が低い技師における判定精度の向上が認められた。赤血球形態判定は半定量的な検査であるため、正確な判定ができるまでに時間と経験を要するが、本簡易的判定方法を用いることで早期力量獲得と標準化に貢献する事ができると考える。

【まとめ】
本簡易的判定方法を用いることで、赤血球形態の半定量的評価について、施設間差や技師間差の是正を行うことができる可能性がある。

連絡先：0562-93-2307